
くるくるゆめものがたり

黒色火薬水溶液

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くるくるゆめものがたり

【Nコード】

N1744M

【作者名】

黒色火薬水溶液

【あらすじ】

貴方に夢はありますか？無い、とおっしゃる方も居るでしょう。しかしながらそれは誤りです。夢とは人が例外なく持っているものです。子供が思う「サッカー選手になりたい」「宇宙飛行士になりたい」など言うまでもなく夢。大人が思う「出世したい」「楽しんでお金が稼ぎたい」これも夢です。アレが欲しい、これがしたい、など全てが夢。どんな些細なことであろうと夢なのです。そして、夢はクルクルと廻り物語を紡ぐ……

前述したことは一切の関係の無い、一人の少女の狂々とイカレた夢のような物語。それがこのお話。狂々夢物語でありますとさ。凄いいこと書いてますが、そんなことはありません。

（前書き）

よく分からないお話です。

深く考えないで進むほうが得策かと…

私が気が付いたら見慣れない場所に居た。

一言で言えば、白だけで形成された世界。

あたりを見渡しても、視界に入るのは白一色。

窓や太陽が見えないのに、しっかりと周りが見える。

そんな白ばかりの世界を見ていると、遠くからこっちに向かってくる影があった。

目を凝らしても良く見えない。が、こっちに向かってくるのだからそのうちわかるだろうと、その影をのんびりと見つめていた。

少しして、その影が何なのかがわかった。

車椅子に乗った人だ。しかも両手を挙げている。

それを見て、私は疑問に思った。

両手を挙げているのならば、どうやって前へ進んでいるのだろうか、と。

そこで、さらに目を凝らしてみると謎が解けた。

その人物の上がっている両手は前後へと交互に動いている。

本来視認できないのにもかかわらず、天井と床が把握でき、その人物の両腕は天井についており、車椅子の車輪は床についていなかった。

これが示す答えはすなわち、天井に手をついてそれだけで歩いているということだ。

なんだ、両腕を上げている理由がわかれば普通のことだったな。

そんなことを考えているうちに、その人物は私のすぐ近くまでやってきていた。

顔を向けると、その人物はどうやら老人のようだ。

老人に挨拶をしようと思ったら老人が口を開いた。

「おお、嬢ちゃんや。この辺で儂の『赤くて黄色い青い色をした、捻じ曲がったまっすぐの丸くて四角い杖』を知らんかね？」

挨拶もしないでいきなり質問とは——と思ったが、よく考えれば挨拶は別れ際に「こんにちは」だったということを思い出した。

……危うく私が恥をかくところだった。早急に用件を伝えた老人に感謝しなくては。

しかし、ココから私は一回も動いていないが老人の言うような杖は見えない。

「いえ、見た覚えはありませんね。特徴的な杖ですし、視界に入れば気づくと思いますし。そうだ、探すのを手伝いましょうか？」

先ほどの感謝の念をこめて、杖と一緒に探そうと提案してみる。

「おお、ありがたい。と、言いたいところなんじゃが、杖をさつき見つけてしまったの。ほれ、あそこじゃ」

老人が私の後ろのほうを指差す。

はて、私が居るときにはそんなものは見えなかったのだけど…

ああ、勝手に動くタイプの杖なのかな。それなら納得だ。

老人が指をさした方向を見ると、そこには――

――『赤くて黄色い青い色をした、捻じ曲がったまっすぐの丸くて四角い』としか形容できない杖を持った、車椅子に乗った老人の後姿があった。

ああ、あそこはこのあたりにつながっていたのか。

ということは、老人はすでに杖を手に入れたってことになる。

しかし、何かがあそこには足りない。よくわからないが、そんな気がする。

刹那の間ほど悩んで、何が足りないのかに気づく。

そつ、あそこには私が居ないのだ。

私は現在見えなくなっているのだろうか。それを確認するため再び老人のほうを向く。

「失礼しますが、私の姿は見えていますか？」

先ほどまで見下ろすような高さにあった老人の顔は、私の視線とほぼ同じ高さになっており、頭の形はそのままに逆さまになった状態であったが、律儀に答えてくれた。

「おお、先ほどまで見えなかったよ。ふむ、ちょうど身体変化の間じゃったからな。全体変化とはめずらしいのお」

なるほど、ちょうどそんな時間だったのか。

それならば、見えなくなるのは当然だな。

しかし、そう聞くと私がどう変化したのか気になるな。

鏡などが無いので、とりあえず体でも見てみようかと下を見ってみると――

——ちみつ娘になっていた。

「ちょっと待てい！」

慌てて飛び起きる。それはもう、ガバツと効果音が付くほどに。

うーあー、変な夢見たー。というか、夢でよかったー。

「私、冷静すぎでしょ………考えてることもおかしかったし………」

さすがに、あの思考回路は無いわ………

「ん？なんか声が変わなあ。風邪でもひいたか、な……」

目を開けると、いつもよりも低い視点が私を待っていた。

背が高いことが若干コンプレックスな私は、いくら座っていてもこんなに視点が低くない。

「まった、洒落にならない！というか、これは夢なんだね！よし夢！寝る！おやすみっ！」

これまた、ガバツと効果音が付くほどに勢いよく布団を被る。

うん、ありえない。だから寝る。

次におきるときは夢が覚めてますように……

（後書き）

初めまして。

本作品は作者が見た夢を弄った代物です。

とりあえず、老人が話しかけてくるまではほぼ変えてませんが。

途中からそこそこ弄ったので良く分からないものに……

しかし、短い。けれど、これが作者の限界……

言い回しや、描写が難しいです……

きっと描写不足でよく分からないところも多そうです。

とりあえず、出来るだけ誤字脱字を出さないようにしつつこいくらい推敲はしました。

それでも見つけましたら、指差して嘲笑いながら報告していただけるとうれしいです。

感想貰えるともっとうれしいです。

もしかすると、調子乗った作者が続きますが。

某所と二重投稿をしております。作者名が同じなので、そちらで判断していただけるかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1744m/>

くるくるゆめものがたり

2010年10月15日23時51分発行